

関東のへそ

「関東のへそ～地勢とくらしのヒストリー～」

関宿は下総国と武蔵国の北の境に位置し、「へそ」のように関東平野と関東地方のほぼ真ん中に位置しています。ここは河川が集中している場所でもあり、土地の低い場所でした。そのため水路を輸送路として利用する水運が発達し、また中世・近世にかけて河川沿いの低地では水田が、台地では畑が徐々に広がっていきます。しかし、河川による水害が多いため、人々は水塚をつくり、河川改修を施していきます。そして改修によって旧河道になった水路は、農業用に利用するなどの有効利用が図られました。

地勢を活かしながら地に根ざした生業は、近代以降は、さまざまな業種の工業化などにより、都市部を中心に減少していきます。また、内陸部の物資輸送も船から鉄道、トラックなどへと変化しながら、関宿周辺の舟運業は衰退し、農業地帯として暮らしを発展させていきました。自然や人為により時代ごとに変化する地理的環境である「地勢」と人々の暮らしとのかかわりについて、探っていきたいと思います。

I 地形が変わる

今から約1万年前頃、気温の上昇によって海進が起こり、内海(うちうみ・陸地に取り囲まれたようになっていた海)や内湾(ないわん・奥行きが広い湾)がつけられました。これは縄文海進と呼ばれ、6000年前頃に最も海が侵入し、東京湾も北関東まで北上しました。その後気温の低下とともに海退(かいたい)に向かい、その場所には河川が流れ、周辺に海跡湖(かいせきこ)などが残り、弥生時代に至って、現在に近い海岸線ができあがります。

こうして出来上がった地形を利用して、地勢と歴史の流れに深く関わったくらしが関宿周辺で行われます。



関東十九州図(複製版)

嘉永元年(1848)

鳥居義

関東を中心に現在の福島県から富山県・静岡県までの広範囲で描かれた近世の地図です。関宿付近に河川が集中し、四方に道が広がっていることがわかります。



縄文海進時の関宿周辺図

【約6000年前の海岸線推定図 鳥居義企画展図録『大地からの叫び』(1998)を参考に作成】



関宿 新宿貝塚より出土した貝殻

縄文時代前期

野田市教育委員会所蔵
内湾の海底の砂地や泥地にすむ貝が多くみられます。

II 東に広がる内海

古墳時代になると関東の台地にも古墳が造られ、海拔の低い土地の自然堤防(川の両側に自然につくられた少し高い土地)などに集落ができました。その後、京都から地方に向かう道がつくれ、それぞれの地域で台地上に役所などが建設され、周りに集落ができました。役所の建設に必要な木材等の運搬のために水路もつくられました。

関宿周辺は縄文海進の影響で沼が多くあり、下総国(しもうさのくに)では、香取海(かとりうみ)と呼ばれる現在の霞ヶ浦周辺が、香取神宮を中心に漁業や流通業で栄えていました。西側には、武蔵国(むさしのくに)があり、今でいう利根川、渡良瀬川、荒川、入間川といった大型河川が埼玉県・東京都をとって東京湾へと流れていました。

関宿周辺には大きな道はありませんでしたが、集落が多くあったことがわかっており、静岡県や愛知県、茨城県つくば周辺の焼き物が使われているため、香取海と太田川の間は舟運(川を使った運送)があり、つくば周辺とも交流があったことがわかっています。



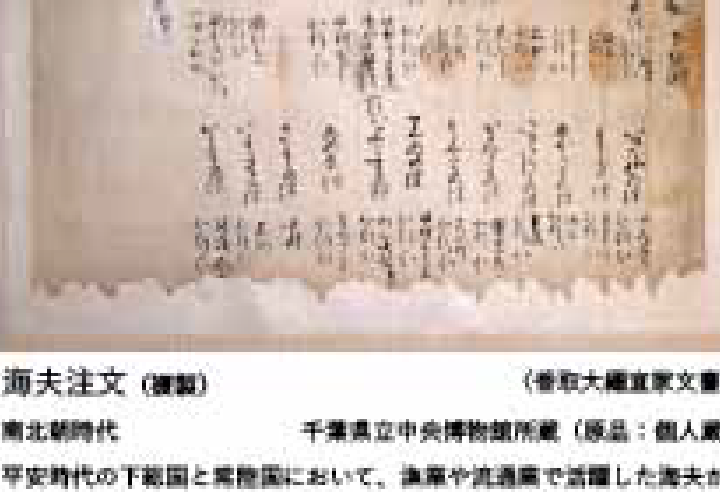
古代の利根川想像図

【関東平野の冒険『日本の国土とくらし』(早川明夫 監修:2017)を参考に作成】



古代の東海道と東山道の変遷

【博文堂路史叢書(中村大一)1992『東京近郊と古代大規模-古代円筒-考古学の成果から-』から作成】



海夫注文(複製)

(香取大蔵家文書)

南北朝時代

千葉県立中央博物館所蔵(原品:個人蔵)

平安時代の下総国と美濃国において、漁業や流通業で活躍した海夫が住んでいる(津)とその土地の船類の名前が書いてあります。



関宿城跡より出土した円筒埴輪

古墳時代

鳥居義

III 武士、関宿の魅力に気づく

中世の武士団は、町場と交通網を作り、自身の所領の水田の改良し、新たな農業技術を取り入れて生産性を上げていきます。そのために自然環境による変化だけでなく、人為的な地勢への改良が本格化します。関宿は下総国葛飾郡下河辺荘内領に属し、地頭として下河辺氏が管理を行っていました。その後、水上活動に優れた築田氏が関宿に入り、古河に移り住んだ方隆の足利成氏に仕えます。

関宿は古河と目と鼻の先にあり、利根川、太田川と常陸川が最も近づく場所、水陸両交通を持っているため、戦国時代、後北条氏が関宿を「一國に匹敵する」として関宿を支配し、舟運の要の場所になります。近世になっても関宿は重要な場所として関所も設けられ、人為的な地勢変化である利根川東遷によって銚子から江戸までの水上ルートが完成し、江戸や関東内陸部への物資の輸送が盛んになりました。



下総国の中世荘園と公領の所在地

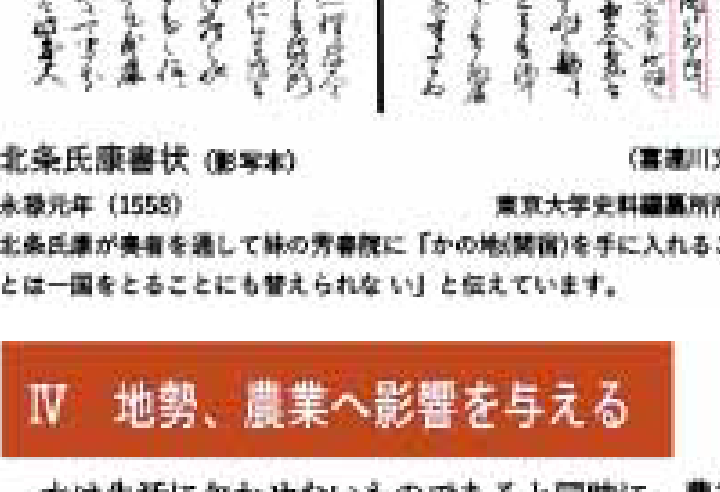
【下総国の中世荘園と公領の所在地『千葉県歴史学』中世』より作成】



地形から見た農地の様子

【『帝國書院地理叢書』(2011)より作成】

地形と農地の関係には深い関わりがあります。地形は大きく、扇状地(土砂量の多い河川が、山地から平野に流れ出たときに形成)や台地、平野に分けられますが、関宿とその周辺の地域は台地、太田川より東は平野になります。



北条氏康書状(影写本)

(喜連川文書)

永禄元年(1568)

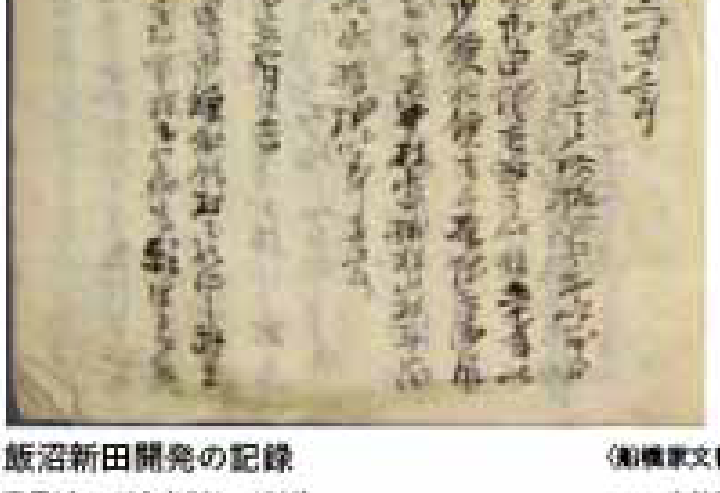
東京大学史料編纂所所蔵

北条氏康が奥書を通して妹の芳春院に「かゝる地(関宿)を手に入れることは一國をとることに替えられない」と伝えています。

IV 地勢、農業へ影響を与える

水は生活に欠かせないものであると同時に、農業にも欠かせないものです。特に米作りでは、水を多く使い、地勢に大きく関わります。そのため、多くの治水工事は、水害対応とともに農業生産の向上の一面を担っていました。

古代から近世にかけて、その時々支配者は水田や畑地などの農地を開拓します。そして農業技術や農具の開発も進みました。



現在も残る谷津田の風景(坂東市)



堀上田写真(埼玉県幸手市神楽宮)

昭和36~45年(1961~69)

国土地理院
灌漑地にいくつもの堀をつくり、出土土をかきあげてつくられた田です。



飯沼新田開発の記録

(海城家文書)

享禄6年~13年(1721~1728)

高橋晋託



水車(みずぐるま)の風景

(絵はがき「利根川の風景・潮来の番外」より)

明治2年(1869)

高橋晋託

V 水害と戦う

利根川東遷は、新田開発、舟運の充実とともに、河川の集約と集中が進み、場所によってはそれまで以上に水害に見舞われるようになります。また幕府が利根川河川敷(かせんじき・流作場(りゅうさくば)といいいます)の開発を行ったこと、浅間山噴火で利根川流域の河床(かしょう)の上昇が起きたこと、関宿に「神出し」が設置されたことなどで、関宿周辺はますます水害が増えています。水害が起こる時期は、6月の梅雨時から10月初旬の台風の時くらいまで、稲作を行う時期と重なるため、水害は住まいを奪うだけでなく、生活の糧(かて)である農地をも荒廃(こうはい)させました。

堤防や川の流路の変更が盛んになるのは、新田開発が進む近世以降です。それまで浸水等により水田にむかなくなった場所を開発したため、そういった地域に住む人々は自衛のために、緊急(きんきゅう)避難(ひなん)場所として盛土をした塚の上に建物を設けた「水(みず)塚(か)」、集落の周囲を堤防で囲んだ「輪中堤(わじゅうづつみ)」などの水防施設をつくるようになります。また各藩では、領内にたまった悪(あく)水(すい)を取り除く排水路の開発も行われるようになります。



安政風聞集

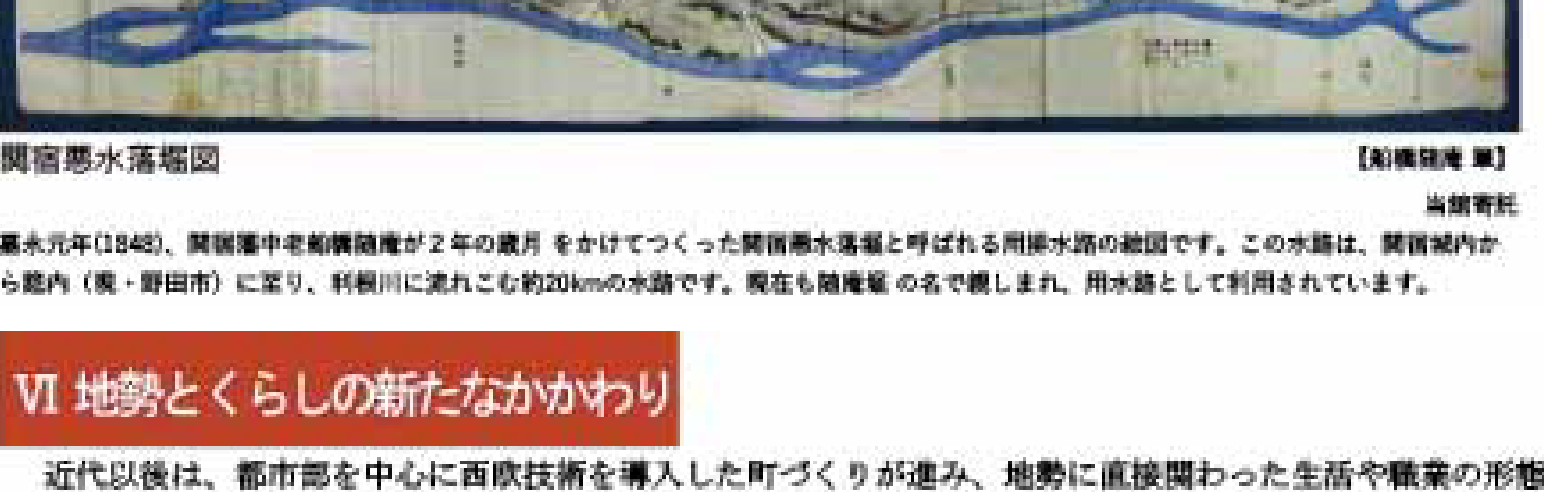
【金谷渠人(仮名)著】

安政3年(1856)

鳥居義



利根川沿いの水塚(野田市)



関宿悪水落極図

【新編関東集】

嘉永元年(1848)、関宿藩中老前橋本庵が2年の歳月をかけてつくった関宿悪水落極と呼ばれる用水路の総図です。この水路は、関宿城内から城内(奥・野田市)に至り、利根川に流れこむ約20kmの水路です。現在も関宿極の名で親しまれ、用水路として利用されています。

VI 地勢とくらしの新たなかかわり

近代以後は、都市部を中心に西欧技術を導入した町づくりが進み、地勢に直接関わった生活や職業の形態が縮小していきます。それとともに、近代化は公害や自然破壊(はかい)を生んでいきます。関宿周辺は、水害対策を主とした明治政府の政策によって舟運(しゅううん)は徐々に衰退し、農業を中心とした地域になりました。水利施設の充実や農機具の機械化が実現する戦後期に、ようやく農業生産が安定します。また、より東京に近い東葛飾地域がベッドタウン化するとともに、生産量が上がりました。

都市部においては、近代に公害問題、現代に環境問題がクローズアップされ、地勢との関わりを見直すくらしを模索(もさく)している中、野田市では、今も残る自然とともに、「自然にやさしい、人にやさしい」環境保全型農業を目指した取り組みを行い、消費者にも安全な農作物作りを進めています。



利根川第一期改修工事

大正2年(1913)

鳥居義



足尾銅山鉱毒被害地各村落の略地図

【『編纂局編第1編渡良瀬川 渡良瀬川治水紀功誌』より】

明治31年(1898)



野田市ブランド農産物認定マークと黒許米のシール

野田市所蔵